

平成24年1月(冬)号

発行：三重耳鼻咽喉科 荘司邦夫・坂井田麻祐子

津市観音寺町 445-15

Tel:059-228-0100 Fax:059-228-0133

ホームページ：<http://www.miejibika.com/>

携帯サイト：<http://www.miejibika.com/i/>

<インフルエンザの豆知識>

寒い季節になり、かぜが流行するようになりました。

最近、インフルエンザの患者さんが急激に増加しています。毎年、必ず流行するものですが、意外にその正体、特徴、対策は知られていないのではないのでしょうか。

昨年秋に発表されたばかりの研究論文から、我々がインフルエンザから身を守るためのヒントとなる豆知識を少しご紹介したいと思います。

「インフルエンザのワクチンを打ったけど、なぜかかっちゃう？」

→ インフルエンザのワクチンは、前年の10月くらいから実施し始めます。打ってから免疫がつくまでに2、3週間かかるので、早めの接種をお勧めしています。ですが、このワクチンで、インフルエンザにかからない「率」は、なんと3割程度。こんな痛い目して、そんだけかと思われることでしょうか。私もそう思います。これには、医学的根拠があります。

インフルエンザのワクチンを打って、体の中で作られる免疫、いわゆる「抗体」ですが、これは血液の中で働く「IgG(アイジージー)」と呼ばれる抗体です。一方、ご存知の通り、インフルエンザは口や鼻から入ってきて感染するわけですが、口や鼻、その先の気管や気管支でインフルエンザをブロックしてくれる抗体は

「IgA(アイジーイー)」と言われる別の種類の抗体です。つまり、注射を打ってもこの「IgA」は増えないため、口や鼻、気管のレベルで防御できず、インフルエンザにかかってしまうというわけです。

これは、ワクチンが無駄という意味ではありません。インフルエンザのウイルスは、口や鼻から入り、体内で増え、血液中にもやってきます。もし、ワクチンを打っていなければ、ウイルスは血液に乗って全身に回り、ウイルス血症という状態になり、重篤な脳症や肺障害を起こす可能性があります。これらの予防には9割以上有効であると言われています。合併症の予防には、やはり必要であると言えるでしょう。

「インフルエンザは2回かかる？」

→ そんなことも、実はあります。

先ほどから出ている「IgA」ですが、これはインフルエンザにかかることによって、体がたくさん作ります。なので、普通は一度かかると、次に同じウイルスに出会っても、口や鼻、気管のレベルで防御するため、二度はかかりません。しかし、ウイルスが体の中で増える前に抗インフルエンザ薬を使うと、症状は早く楽になりますが、「IgA」は作られないままとなります。そうすると、もう一度同じウイルスに感染することになります。なんとも、皮肉なものです。

「インフルエンザの薬と抗生剤を一緒に飲む意味は？」

→ インフルエンザにかかった場合、一般的には抗インフルエンザ薬で治療しますが、抗生剤と一緒に処方することがあります。従来から、インフルエンザで気管などの粘膜が弱くなると、バイ菌も一緒に付いて二次感染を起こす恐れがあることから、その予防的な意味で抗生剤と一緒に処方することがありました。最近の研究で、マクロライド系と呼ばれる抗生剤と一緒に内服することにより、インフルエンザによって引き起こされる様々な弊害

を予防出来ることが分かってきました。

その弊害とは・・・

インフルエンザというウイルスは、ウイルスそのものが抗インフルエンザ薬で退治されても、その後に残った炎症性物質が続けて悪さをすることが知られています。インフルエンザのウイルスが体に入ると、我々の体は過剰に免疫反応を起こすそうです。その時に炎症性物質が作られるのですが、これらがインフルエンザの重症化にとっても関係があるようです。脳症や肺障害にも強く影響しています。

マクロライド系の抗生剤は、併用することによりこれらの炎症性物質が作られるのを予防できるようです。抗菌作用は決して強くはないのですが、違うメカニズムでインフルエンザの症状を軽減してくれるのです。

さらに、抗インフルエンザ薬とこのマクロライド系の抗生剤を併用することで、先ほどから出ている「IgA」抗体も増えることが分かってきました。再発も抑えられるというわけですから、一石二鳥です。

もともと、この種の抗生剤は、気管支拡張症や副鼻腔炎の人にはよく使用されるものです。慢性の疾患でするので年中内服していることが多く、このような方々は実はインフルエンザにかかりにくいと言われていました。それが、科学的に実証されつつあるということですね。

「インフルエンザの感染力は強い？弱い？」

→インフルエンザは、この時期流行し、学級閉鎖や学年閉鎖の理由となる疾患ですね。流行を抑えるための措置ですが、かかった人も、熱が下がってから2日間は自宅待機という決まりが設けられています。しかし、家族にインフルエンザの人がいても移らないこともありますね。本当に、インフルエンザは感染力が強いのでしょうか。

感染症には、移り方や移るのに必要な時間があります。例え

ば、子供がインフルエンザにかかっている、間近で看病をしていたり、発症直前に同じ食器で食事をしていたりすれば、直接ウイルスを浴びていることになり、かかりやすいと考えられます。しかし、学校や広い空間の場合、24時間以上同室にいないければ感染しないと言われていています。家族でも、出勤が早く夜の帰りが遅いお父さんはおそらくかかりにくいでしょう。

一時、麻疹（はしか）の流行が騒がれました。この麻疹は、インフルエンザの8倍以上の感染力です。同じ部屋に20分以上いると感染します。水痘（水ぼうそう）は、インフルエンザの4～5倍の感染力で、1時間以上同室にいると感染します。これらの疾患と比べると、インフルエンザはあまりたいしたことがないということになります。

とはいえ、やはり流行するインフルエンザ対策は必要です。ウイルス侵入の入り口である口や鼻をマスクで覆っておくこと、のどの免疫を強くする目的で水分を取ったりうがいをしたりしてなるべく潤しておくこと、手洗いや手の消毒をすることなど、基本的ですがやはり一番の予防法です。私も今までたくさんのインフルエンザ患者さんを診察しながら、感染したことはありませんでした。マスクを着けて診察し、処置毎に手を消毒しているからです（接触時間が短いこともありますが）。しかし、自宅に感染源がいたのはうかつでした。自宅では加湿はしていたものの、マスクは着けておらず、子供の食べ残しも全部食べていたら、知らないうちに感染してしまいました。だるさや体の痛みはこれまで体験したことがないつらさで、やはり予防には気を抜いてはいけないと反省しました……。皆様も、この季節は十分お気を付けください。

（文責：坂井田）